

## 哲学と幸福

### －ソクラテスの「哲学の勧め」とプラトンの高等教育－

金 山 弥 平

---

#### <要 旨>

本稿は、哲学、とくに哲学史の教育が、共同生活を営む人間の生きがい、幸福の源泉となりうること、またその点に関して初等哲学教育と専門哲学教育の間に本質的相違はないことを論じる。哲学は、単に何らかの問題を立てて自由に議論することではない。自由な主体的思考と思われるものが実際には、無意識の願望から結果する既成の判断であることはしばしばある。哲学は自らの思考を反省的に振り返ることによって真実へと接近し、より善き生き方をするところに成立する。大学での哲学教育は、プラトンの「魂の向け変え」を通して、消費者にすぎなかった学生を主体的生産者に変える最適の方法である。哲学史の学習は、現代の限られたパースペクティブとは別の見方に立つことを可能にする訓練として特に有効である。教師と学生の協力のもとになされる原典理解の試みは、チャレンジングな問題の克服の仕方の訓練として、現代の複雑な社会において刻々と移り行く情勢の変化に対応しうる知的能力を養い育てる。心の深い思考と感情を筆記しようとする哲学の訓練は、優れたゼネラリスト－この世界における win-win ゲームの勝利者－を生み出すまたとない方法である。

---

#### 1. 哲学入門と専門哲学

哲学 (philosophia) の原義は、「知恵 (sophia) を愛し求める (philo-)」である。アリストテレス『形而上学』は、「人間はすべて自然本性的に (生まれつき) 知ることを求める」と言う。知の希求が人間の本質であるとするれば、人間だれしも哲学者であり、人が好奇心をもって何かを考えると、そこに哲学が成立しているとも言えよう。大学の哲学教育においても、主

体的に、また自由に考える場を提供すれば哲学教育は成り立っていると言えるのかもしれない。しかし「主体的に・自由に考える」というのもさまざまに解することができる。時事問題であれ何であれ、問題を立てて考えるなら、哲学が成立しているとも言えそうである。しかしソクラテスが知識を自認するアテナイ人を吟味し、彼らの無知を暴露したように、「主体的に・自由に考えている」つもりが、実は主体的に考えていない、あるいは既成の枠組みに縛られている、ということもありうるのである。「気の向くまま・好き勝手」という意味で「主体的に・自由に」論じあえば、そこにおいて哲学が成立しているとするのは、当時のギリシア人の一般的な「哲学」理解でもあった。プラトン『ゴルギアス』（484C-486D）には、不正を行いながら裁きを免れる者こそ最も不幸であると主張するソクラテスに対して、綺麗事を言っているとして激怒したカリクレスが次のように語る場面がある。

哲学は人が若いころ、ある程度触れる分には結構なものである。この年ごろに哲学に触れないのは、自由人らしからぬことである。しかし、いい年になってもまだ哲学をしているようでは、一人前の人物になるための経験がおろそかになってしまう。ソクラテスにしても、そろそろ哲学から足を洗わないと、だれかから訴えられても言うべき言葉を見出せず、しまいには死刑にされるであろう。

プラトン『国家』（473Cff）においても、哲学者が国を治めるか、あるいは、現在の権力者が哲学に従事するのでないかぎり、国々にとって、さらには人類にとって不幸が止むことはないという哲人王思想をソクラテスが示したとき、グラウコンがそれに対して、そんな発言をすると馬鹿にならない者たちの猛攻撃を喰らうでしょうと語る場面がある。これに対してソクラテスは、そうした反応は「哲学」への誤解に基づいており、「学問について選り好みをする者、とくに、まだ年若く、有益なこととそうでないことの違いも得ていないのに、そういう態度を示す者」は真の哲学者ではないと語る（475B-C）。この一連のやりとりは、好き勝手に議論しさえすればそれで「哲学」になると当時考えられていたことを示唆する。そうした議論の中ではしばしば、あらゆる物事を批判的にし、打ち壊そうとする試みも行われたであろう。ソクラテスが「若者を腐敗させ、国家の認める神々を認めず、別の新奇な神霊を祭っている」として訴えられたとき、彼はそう

した活動を扇動する者とみなされていた(『ソクラテスの弁明』23C, 24B-C)。

またその「哲学」においては、あるべき考察法について反省的に検討されることはなかった。『パイドン』(89D-91C)においてソクラテスは、しかるべき技術なしに行われる議論は「言論嫌い(ミソロゴス)」を生み出す恐れがあると警告するが、ソクラテスのような正しい導き手なしに行われる好き勝手な討論としての「哲学」は、確かに言論嫌いー真正の哲学的言論をうっとうしく思う人間ーを産む危険を孕んでいるであろう。

ソクラテスは、またプラトンも、しかるべき方法なしに好き勝手に論じることを哲学とはみなさなかった。ソクラテスは、同胞アテナイ人のすべてがその一生を通じて正しい仕方で哲学に従事し、自らの魂の配慮をして生きるべきであると考えた。またプラトンはアカデメイアを創設し、哲学教育によって優秀な人材を育てようとしたが、その折に念頭にあったのは、真の哲学者の育成のためには、幾何学、天文学等々の高度の教育が必要とされるという考えであった。問答を通して誰とでも哲学を行おうとしたソクラテスと、哲学活動を一部のエリートに限定したように見えるプラトンの異同は、それ自体ここでは扱えない解釈上の大きな問題である。しかし次のことは言うことができる。「哲学」は次の三つのレベルで理解される。(1)カリクレス等の人々の「哲学」理解：何であれ勝手気ままに、方法なしに論じること。(2)ソクラテスが考えていた「哲学」理解：あらゆる人が豊かな人生を目指し、しかるべき方法に従って行うべき魂の配慮としての哲学。(3)プラトンの「哲学」理解：広い教養が必要とされる専門的学問としての哲学。

(1)は当然ながら真正の「哲学」の名には値しない。もしも初めて哲学に触れる新入生が、このレベルで哲学を理解しているとすれば、哲学教育の最初の段階において、彼らの理解をレベル(2)にまで引き上げることが重要な課題となってくる。教養教育としての哲学の授業の大きな役割の一つはここにあるだろう。(3)はそのまま、現在の大学で行われる専門的哲学ー哲学専攻の学生が従事する哲学ーに対応するわけではない。というのも、プラトンの場合は国家の政治に携わる将来の哲人王を育てるのが哲学教育であるが、大学で哲学を学ぶ学生は、将来政治家になるわけではないからである。しかし政治家にならなくても、また大学・高校等の哲学教師にならなくても、大学を出た各人は、各分野・各集団で何らかのリーダー的役割を果たすことは期待されている。そして後に示すように、専門哲学教育は、哲人王と言わないまでも、各分野でのリーダーを育てる役割を十分担いう

るのである。

大学における哲学教育の役割は、学生をレベル(1)から(2)、さらには(3)へ高めていくことにある。それはどのようにしてなされるのか？

## 2. カンニングと真の幸福

6年前になるが、2004年5月15日のBS1「世界のレポート」で、米ABCテレビのNightlineに基づき、アメリカの大学の当時最先端のカンニング事情が紹介された－アイビーリーグ等の有名大学の学生が、試験では携帯を利用（悪用）して答えを教えてもらい、宿題のレポートではインターネットからのコピーペーストで済ませる、またある学生は、他の学生のレポートを代筆して金を儲ける、というのである。日本でもインターネット悪用のコピー・レポート、および論文が増加しつつあるのに対抗して、昨年あたりからコピー判定支援ソフト・システムが産学協同ビジネスとして販売されているようであるが、アメリカではすでに2004年の時点でそうしたソフトが開発されていた。それをういて学生のレポートを抜き打ち的に調査したところ、多くの大学生が小学生のレポートをコピーしていたという話も出てくる。カンニングする学生の言い分は、「大人だってインチキをしている」、「大学で勉強したことの3パーセントしか、社会に出て役に立たないと聞いている」、「インチキをして金儲けをすることは、現実生活に出ていき、将来のビジネスをする際の訓練となる」などというものである。こうした学生の主張は、先に挙げたカリクレスの立場に通じる－「まじめな勉強は子どもの頃やっておく分にはよい。しかし大学生になっても同じことを続けているのであれば、経験がおろそかになり、現実社会では半人前にしかなりえない」。

しかし実際はどうか？ ロチェスター大学卒業生を対象に行われた興味深い調査がある。それは、富や名声といった「外発的抱負」を指導原理とする利益追求型の学生と、他の人々への奉仕とその生活の向上、自らの学びと成長等の内発的抱負を指導原理とし、人生の目標となるものを目指していこうとする学生の二種類の学生について、real world（現実世界）へと船出したその1～2年後、どのような生活を送っているか、調査したものである。結果は次のとおりであった。内発的抱負に導かれた卒業生は、大学時代よりもより大きな満足と幸福感を享受でき、また不安感も少なかった。これに対して外発的抱負に導かれた卒業生は、富、人からの賞賛等

の目標に近づいている場合でも、大学時代以上に、満足・自分に対する誇り、ポジティブな感情を得ているわけではなかった。彼らの場合、目標達成が幸福感を増大することはまったくなく、それどころか、不安、抑鬱、その他のネガティブな指標が増大していたのである（Pink 2009: 142-3 = 2010: esp. 202-4）。

ギリシア哲学の伝統では、哲学の重要な役割は、人がポジティブな感情をもって幸福に生きるのを可能にする知恵を求めることにあった。古来「哲学の勧め（protreptikos logos）」と呼ばれる次のような議論がある（プラトンの『エウテュデモス』278E-282E, 288D-293Aを参照）。人はみな幸福（ギリシア語では「エウ（善く）・プラッテイン（行為すること）」）を欲するが、富も名誉も美貌も健康もこの目的を保証しはしない。それらはうまく使えば益に働き、そうでなければ害をもたらす。それゆえ幸福のためには、それらを正しく用いる知恵が必要であり、従って知恵（sophia）を愛し求めること（philo-）、すなわち philosophia をしなければならない。

philosophia の訳語「哲学」は、西周がその講義案（1862）において「希哲学」という語を用いたことに始まる（西 1960: 16-17; 田中 1977: 2）。

ソクラテスといへる賢人ありて、また此語を継ぎ用ひけるが、此頃此学をなせる賢者たちは、自らソヒストと名のりけり。語の意は賢哲といふことにて、いと誇りたる称なりしかば、彼のソクラテスは謙遜して、ヒロソフルと名のりけるとぞ。語の意は賢徳を愛する人といふことにて、所謂希賢の意と均しかるべしとおもはる。此ヒロソフルこそ希哲学の開基とも謂べき大人にて、彼邦にては吾孔夫子と並べ称する程なり。……

この「希哲学」の頭の部分「希」が落ちたのである。原義からすれば、どんな学問であれ、知を愛し求めるところに、「哲学」、「希哲」、あるいは「希賢」の精神は息づいていると言える。しかも、先に述べたように、哲学はその知を人間の幸福（善い生き方）のために役立てようとする。むしろ、役立てようとしなくても、本物の知であれば必ずや人間の幸福（善い生き方）に通じる—そう哲学は確信し、知を求め、その過程において、まさしくそのとおりであることを確認するのである。

真の知が幸福に通じることは、カリクレスの「弱肉強食」思想との対抗関係においても主張しうることである。「弱肉強食」あるいは「適者生存」

の思想を採用したロチェスターの卒業生たちは、幸福になりえなかった。それは、現実世界がそうした世界であるという彼らの考えが間違っていたからである。本当はどうか？ ダーウィンの theory of evolution<sup>1)</sup>は現代、最も影響力をもつ理論の一つである。その立場としてしばしば主張されるのが「適者生存」である。しかし survival of the fittest は、ダーウィン自身が最初から用いた言葉ではなく（『種の起源』第 5 版が初出）、ハーバード・スペンサーが用いはじめた用語であった。なるほどそれは自然界の一側面ではある。しかし、当時の富裕層がダーウィンの natural selection（自然選択）を「適者生存」という標語のもと、社会に適用したとき、彼らは価値中立的な科学的見地に基づいてそうしたわけではなかった。彼らは、自然界の一側面にすぎないものを、人間社会における行動の規範として採用し、自分たちの施策を正当化しようとしたのである（De Waal 2009: x, 28-9）。

ダーウィン自身は次のように考えていた。

次の命題は非常にもっともな命題だと私には思われる。すなわち、親子間の情愛も含めて、明確な社会的諸本能を具えた動物はすべて、もし仮にその知的諸能力が人間の場合と同程度に、あるいはそれに近い程度にまで発達したとするならば、必ずや道徳的感覚ないしは良心を獲得するであろう。というのも第一に、社会的諸本能は動物を導き、仲間との社会生活から快を得るように、また仲間に対してある程度の共感を感じるように、そして仲間を様々な仕方で手助けするようにする……（Darwin 1879 [2004]: 120-1, cf. De Waal 2009: 8）。

社会から得られる快の感情は、おそらく親子間の情愛が拡張されたものであろう。なぜなら、社会的本能は、弱年のものが長いあいだ親とともに過ごすことによって発達するように思われるからである。そしてこの拡張は、部分的には習慣にもよるのであろうが、しかし主として、自然選択によるものであろう。親しい交友関係の内 で生きることによって益を得る動物においては、社会生活から最大の快を獲得する個体は、様々な危険をもっともよく回避しえたであろうし、他方、仲間のために配慮することが最も少なく、孤独に生きた個体は、よりいっそう多くのものが滅びたことであろう（Darwin 1879 [2004]: 129）。

同様の消息はプラトン著作の内に見出しうる。社会生活を行う動物は、協力して外敵に立ち向かう必要がある。どんなに敵が強くても一よりは多の方が強い（『ゴルギアス』488D）。特に人間の場合、闘争・逃走用の身体的能力において他の動物に劣っており、それゆえ畏敬と正義が、彼らの共同を促進して生存を助けるように全人類に与えられた（『プロタゴラス』322C-D）。たとえ盗賊の集団であっても、仲間同士で不正を働きあっているのは、目的達成は不可能である（『国家』351C-E）。ソクラテスがカリクレスに反論して主張するように、天と地、神々と人々等、すべてを一つに結び付けているのは共同、友愛、秩序、節制、正義であり、それゆえ知者たちは、宇宙の総体を「コスモス（秩序）」と呼んだ（『ゴルギアス』507E-508A）。もちろん自然世界の内に、適者生存的側面があるのは否めない。しかしそこに目を奪われ、生存（生物の存在）を助けるものとして、正義と共同が人間も含めた諸々の動物に具わっていることを見落としてはならない。

アメリカ心理学協会の会長も務めたセリグマンは、ポジティブ心理学の成果を踏まえ、人間の幸不幸に影響する要因を次のように語っている。

我々の過去の善い出来事を十分大切にせず、味わわないこと、また悪い出来事を過度に強調することは、心の平静、満足、充実感を損なうという犯罪の二大張本人である。過去に関するこれらの感情を満足と充実感にうまく移行させる二つの方法がある。感謝は、過ぎ去った善い出来事を味わい、大切にす姿勢を拡張する。また許すことによる過去の書き換えは、悪い出来事が苦い思いをさせるその力を緩和する（そして実際、悪い思い出を善い思い出に変えるのである）（Seligman 2002: 70）。

この世界には、勝ち負けを争い、一方の得が他方の損に通じる zero-sum ゲーム、あるいは win-loss ゲームもあれば、両方が得をする win-win ゲームもある。赤ちゃんがほほ笑むと母親もほほ笑み、母親がほほ笑むと、赤ちゃんはもっとほほ笑み、それが母親の笑顔さをさらに大きくし、赤ちゃんと母親双方の健康に有利に働くのは、この win-win ゲームの典型である。

さらにもう一つ幸福にとって重要なのは、チャレンジを乗り越えていくことである。ただ単に欲求を満たすというだけでは人間は幸福になれない。というのも、「快樂の踏み車（hedonic treadmill）」の現象により、欲求を満たして快樂を味わっても、すぐにその状態に慣れて物足りなくなり、新た

な欲求が生じるが、しかしそれを満たしても、またその状態に慣れ、同じことが繰り返されるだけで、ぜんぜん前へ進まないのが人間のあり方だからである。チクセントミハイは次のように言っている。

内的経験の最上の状態は、意識内に秩序が存するときである。これは、心理的なエネルギーあるいは注意が諸々の現実的な目的に注がれているとき、そしてまた技能が、行為の機会に見合っているときに生起する。人は目前の仕事に注意を集中し、瞬間的に他のすべてを忘れなければならないが、そのことのゆえに、目的の追求は、意識内に秩序をもたらす。これら諸々のチャレンジを乗り越える苦勞をしている時こそが、自分の人生における最も楽しい時であることが見出される時なのである（Csikszentmihalyi 2008: 6）。

教育も、母親と赤ちゃんの関係のように win-win ゲームの典型である。しかも教育においては、教師と生徒がともに助け合い、チャレンジを乗り越えていく。カンニングをよしとする学生は、教育・学習の機会を win-loss ゲームの場に変質させてしまうとともに、チャレンジ克服に基づく喜びの機会を失い、その意味で本当は二重に損しているのである。

### 3. 役に立つわずか3パーセントの背後に隠れたもの

しかしなお「大学で勉強したことの3パーセントしか社会に出て役に立たないではないか」と反論されるかもしれない。確かに、記憶に残る情報という点からすれば、大学で覚えたことのごく一部しか将来用いられない。しかし、かつて覚えたことは意味がなかったのか？ 明らかなのは、3パーセントのことしかインプットされていない場合は、思考を働かせて行われる作業は非常に限定されるということである。ある問題について考えるためには、思考活動のための素材が必要である。使用した素材は、問題が解決されるなら、忘れられて一向に構わない。大切なのは問題解決の過程で培われる我々の能力である。3パーセントを言いたてる主張は、培われた能力を完全に無視し、今現在も利用されている素材しか念頭に置いていない点で、完全に間違っている。

大学で重要なのは、Nightline でも言われていたことだが、学ぶことを通して学ぶこと－問題を解決する仕方－を学ぶことである。我々は社会に出

てからも新たな問題に出会い、それに対して最善の仕方に対処していかなければならない。どのようにすれば最も優れた選択肢を選びうるか、それを知るにいたる道を学ぶことこそが、大学で学ぶべきことである。そして「学び方を学ぶ」という点で最も優れた教科の一つが哲学なのである。

そもそも「学ぶ」とは何であるのか？ これは、プラトンが『メノン』において、「学ぶとは想起することである」とするいわゆる「想起説」を提示して以来、哲学の大きな問題でありつづけた問いである。「想起」とはいかなるものなのか、それ自体異論の多い問題である。ただ明らかなのは、メノンが受動的に覚えることをもって「学ぶ」としたのに対して、ソクラテスは、「学ぶ」とは外部からの知識の注入ではなく、主体的考察による内発的取り出しとみなしたということである。プラトン自身、想起という不可思議な考えを提案することにより、「学び」に関する我々の考察－我々の学び－を喚起しようとしたように思われる。

しばしば言われることであるが、大学に入ったばかりの学生は、その大多数が記憶を重視してきた大いなる消費者である。大学では彼らを生産者へと変えていく必要がある。プラトンは、メノンをソクラテスの対話相手とするにあたって、彼の名前がもっているギリシア語「ムネーメー（記憶）」、「メネイン（留まる）」との連想を強く意識していた。メノンは結局、消費者に留まり続け、最終的に悲惨な死を遂げることになった。クセノポン『アナバシス』（第2巻第6章29）によれば、ペルシア大王アルタクセルクセス二世の王位篡奪を試みたその弟キュロスに従い、東方遠征に参加した指揮官たちのうち、他の者たちは斬首刑によって速やかに処刑されたけれども、ひとりメノンは、悪人として1年のあいだ残酷な生を強いられたのち、やっと死ぬことを許されたのである。

プラトンは、記憶した情報を消費するだけの人間を、考察者・生産者へと変える方法を模索した。彼は『国家』の洞窟の比喩の最後の部分で次のように言っている。

教育というのは、魂のなかに知識がないから、それを中に入れてやる、といったようなものではない。むしろ魂にすでに内在している能力と学ぶための器官を魂全体とともに、生成するものの側から向け変え、存在するもの、また存在するもののうち最も明るいもの－すなわち善－を観つづけるのに堪えうるようにすることである（518 B-D）。

しかし、魂を向け変えるためにはどうすればよいのか？ 先に「主体的に考える」ということを、哲学的な思考の指標として指摘した。主体的考察の一つの大きな要素は、当たり前と思っていることを自分でもう一度吟味し、それを支える諸前提をも考慮に入れて、本当に受け入れるべきものかどうか、反省してみることである。しかしこれは困難なことである。なぜなら、人間はしばしば、意識しない欲求に基づき、自分が信じたいものを信じ、客観的に正しいとみなすからである（Gladwell 2005: 14-5）。スペンサーの「適者生存」が「かくあるべし」という思想として当時の富裕層の心を掴み、広く信じられるようになったのは、彼らが貧困層の存在に良心の呵責を覚え、貧しい人々を無視して済ましうる「科学的」（とみなしうる）根拠を欲していたからであった（De Waal 2009: 30-31）。

また、スピード・デート（speed dating）を用いた次のような実験もある（Gladwell 2005: 66-7）。スピード・デートとは、約10人の未婚女性と同数の未婚男性が一堂に会し、壁に沿って坐った各女性の前の席に男性が一人ずつ腰かけ、6分会話をしては次の女性へと移動し、一巡する中で気に入った相手を見つけようとするイベントである。実験ではこのデートの以前と以後に、好みの異性像を述べさせてみるのである。すると、例えばメリーは、見合い前には「知的でまじめ」と答える。ところが実際に好きになった男性ジョンの性格は、「知的でまじめ」ではなく、「魅力的で愉快」であることがある。その場合、翌日もう一度好みの異性像を選ばせると、メリーが選ぶのは「魅力的で愉快」に変わっている。しかし、ひと月後に再度同じ質問をすると、「知的でまじめ」に戻っているのである。

我々の判断と行動は、このように無意識的な過程に左右されている。我々が、自分の行動の理由として意識するものは、「説明」であるよりはむしろ、しばしば我々が作り出した「物語」にすぎない。無意識的に行動を選んでいくことそれ自体のうちには、プラスの面もある。仮に思考と判断に基づいて行為する道しか我々に開かれていないとすれば、感覚に入ってくる無限とも言える情報を意識的に処理しようとあがくなかで、生存のために適切な行動を即座に採ることは不可能となるであろう。しかしマイナス面もある。我々は意識せずに、生存を支える低次元の欲求に左右され、悪くすると、理性が欲求に従属し、劣悪な行為の正当化のためにのみ働くという、プラトン魂三部分説で描かれるところの独裁者状態に墮落してしまう恐れがある。それを回避するためには、意識下にありうるものを反省的考察のもとにおき、そこに何らかの仕方働きかけ、意識下の欲求を、より優れ

た欲求-win-loss ゲームではなく、win-win ゲームを喜ぶ種類の欲求-に変えていく必要がある。

人間が生まれながらにもっている基本的感情には、win-win ゲームに関わる肯定的感情としての喜びや愛もあれば、恐れ、怒り、悲しみ等、win-loss ゲーム用に具わった感情もある (Goleman 1995: 6-7, 290)。このうち主導権をとりがちなのは、loss に対して敏感に反応し、せめて生存だけでも確保しようとする後者の感情である。しかしそれらの感情、あるいはむしろそれらが引き起こす否定的ムードが日常生活を継続的に支配するとき、脳のワーキングメモリーは食い尽され、正の感情が入り込む余地が減少してしまう。大切なのは正の感情の支配を強化して否定的ムードを解消することであり、その有効な方法の一つが、見方を変えることにより、世界が示す負の様相を正へと転換する認知的再評価 (reappraisal)、および枠組み変換 (リフレーミング reframing) である (Goleman 1995: 60-2, 74)。そしてそのために最も有効なのは、「弱肉強食」的発想をも含めて既成の判断が真に「知」の名に値するものかどうかを吟味する、ソクラテス的な「無知の自覚」に基づく探求である。win-loss ゲームの狭い世界から、win-win ゲームの広い世界へと学生を導き、より善い生き方の可能性を示し、ともに反省的考察を進めていくことは、哲学教育の重要なミッションの一つであろう。

#### 4. 哲学史の力

しかし、反省的考察を進めると言っても、どのようにすればよいのか？ 最も有効な方法は哲学史を教えること、また学生とともに、過去の哲学者のテキストをきちんと読んでいくことである。過去の哲学者のテキストの読解を基本とする哲学-すなわち「哲学史」-は、しばしば「哲学学」というレッテルを貼られ、揶揄される傾向にある。しかしそうした批判は、過去の思想内容は自明であるという誤解の上に成り立っているにすぎない。過去と現在を隔てる時間的隔たりには、現在の異文化社会を隔てる空間的・文化的隔たりに匹敵するものがある (Lloyd 2004: 10-1, 188-9=2009: 14-6, 275-7)。我々は、いわゆる先進国がリードする現代世界に生きる日本人の眼鏡を通してものを見ている。そこで得られた像を基準として問題を論じるかぎり、その世界の諸前提と矛盾するような発想は出てきにくく、答えはかなりの程度定まっている。民族誌学の諸研究は、いわゆる先進国が採用するのとは異なる、この世界の事物の分類また存在論の成立を明らかにし

ている。他の異質な社会の人々の思考様式を捉えるためには、彼らと同じ体験をすること－アウトサイダーとしてではなく、インサイダーとしての経験－が求められる。例えば、現代の魔女社会においてそのインサイダーであることがどのようなことであるかを理解しようとするれば、研究者自身インサイダーにならねばならない (Luhrmann 1989: 14-8; cf. Lloyd 2004: 90 = 2009: 128)。しかも同時に、単なる自己の主観的状态の枠から外へ出て、多数の他のインサイダーも体験しているより客観的状态に近づくこと、そしてさらにアウトサイダーも理解しうる言語で記述することが必要とされる。アウトサイダーであったときのパースペクティブを相対化するとともに、インサイダーとなってからのそれをも相対化するような批判精神が求められるのである (Lloyd 2004: chs.7-8 = 2009: 109-74)。同じことが、哲学史においても－2000 年以上も前の古い時代の哲学の研究では特に－要求される。

テキストに現われた思想を簡単に読み取れるものとして文献に接し、絶対視した自分の見方をテキストに読み取っていただけなら、砂を噛むような作業でしかなく、そうした面白くもない作業は確かに「哲学学」と呼ばれてしかるべきであろう。しかし、本当の哲学史の学習はそうしたものではない。「哲学学」というレッテルで哲学史を揶揄することは、若い魂が、過去の哲学者の前に謙虚になり成長していく機会を奪うことに通じる行為でしかない。

プラトンは「思考 (ディアノイア)」 (= 思惟 (ノオス) の行き来 (ディア)) とは、魂の内なる「対話・問答 (ディアロゴス)」 (= 言葉・理性 (ロゴス) の行き来 (ディア)) であると言っている。自分一人でじっくり深く考えようとするにも確かに意味はある。しかし、それでは一つのロゴスがいつまでも行き来するだけで、堂々巡りに陥るであろう。仲間をみつけて二人でロゴスを行き来させるのもよいかもしれないが、しかし、気心の知れた仲間との対話と、プラトンとの対話と、どちらがより優れた対話に発展する可能性を秘めているのだろうか？ 友人は自分の問いに直接答えてくれるが、プラトンは直接答えてくれない、と言うのであれば、プラトンに答えさせるための努力がまだなされていない、と言うべきであろう。求めている問題への解答は簡単には得られない。プラトンは、言葉の重層性を駆使して、彼の思想を示そうとした－というよりはむしろ、人間の思考が及びうる限界まで、言葉を駆使して、対話篇の読者とともに探求を行おうとした。彼は答えを提供しない。彼から答えを引き出そうとするなら、

あるいはむしろ彼とともに答えを発見しようとするなら、我々の側でも、プラトンの千分の一努力なりともしようとしなければならないであろう。

哲学史の展開において、新たな思想は無から生まれはしない。優れた思想があったから、それとの対決の内に自らの視点をも超える立脚点を探り求めることによって、偉大な思想は生まれてきた。古代であれば、タレス以来の自然哲学者との対決の内でバルメニデスの思想は生まれ、バルメニデスとの対決の内で原子論は生まれ、プロタゴラス的相対主義との対決の内でソクラテス、プラトンの哲学は生まれ、プラトンとの対決の内でアリストテレス哲学は生まれ、プラトン、アリストテレスとの対決の内でヘレニズム哲学は生まれた。今日の日本の哲学研究者のだれ一人として、ソクラテス、プラトン、アリストテレス、またその後の著名な哲学者たちよりも、哲学者としてより優れているわけではないことには、だれでも同意するであろう。こうした人々の思想に触れること、とりわけ原語によって触れ、その世界に入ることは、彼らが思考の達人であるだけに容易なことではない。しかし、それは次のようなメリットをもっている。

第一に、外国語は日本語とは異なる独自の概念的ネットワークをもっており、その意味で外国語による読解は、日本語による思考形式と異なる思考形式の習得でもある。その場合、哲学のような抽象的概念を用いた作業は、日常的概念による場合以上の効果をもたらす。なぜならヴィゴツキーの指摘によれば、兄弟 (brother) のような日常的概念と、アルキメデスの原理や、搾取 (exploitation) のような科学的概念－哲学で扱われる抽象的概念もその仲間である－の内、日常的概念は小さい頃からの生活の中で身についてくるものであり、生活に密着しているため意識的に把握することは困難であり、また一義的に意味を規定しにくい。後者の種類の概念もまた、把握困難なものではあるが、その理由は異なる。それらは抽象的であり、明確な認識のためには言語を操る能力が必要とされるのである。では、両者の概念の習得のためには何がなされるべきなのか？ 両概念の理解は、別々に発達するものではない。日常的概念はすでにボトムアップで具わっているが、科学的概念は言葉を通して言わばトップダウンで他の諸概念と関係づけて習得される。そしてそれとともに日常的概念も、複雑な諸概念のネットワークの中に位置づけられるのである (Vygotsky 1986: 192-197)。哲学的諸概念の正確な用法を、過去の哲学者の著作を通して学ぶことは、確かに、こうした位置づけのための有効な方法であろう。エキスパートとは、適切な言語をもってボトム (生活の基底) に存する曖昧な部分を分節

化しうる人なのである (Gladwell 2005: 184-91)。

第二に、その際、学習者は単に外国語による概念枠の世界に入っていくというだけではない。別の時代の概念枠、しかも哲学者の強靱な思考体系の中に入り、その思索に可能なかぎり肉薄しようとする。

第三に、学問としての哲学は、勝手気ままに思考するところに成り立つものではない。哲学にもそのゲームのルールがある。しかしそれはルールブックを学ぶことによって学びうるようなものではない。ゲームに興じることが学習の手段でもある。ヴィゴツキーは、前掲書で概念の習得と言語の学習の間の類似性を指摘しているが、後者の言語の学習について、ヴィトゲンシュタインは、言語ゲームという概念を利用し、そのルールについて次のように言っている。「我々は、言語を用いる際、用法の諸規則について—定義等々について—考えないばかりでなく、そうした諸規則を与えるように求められるときには、たいていの場合、規則を与えることができない」(Wittgenstein 1969: 25)。「教えられ、続いて適用されるルールは、それがその適用に含まれているかぎりにおいてのみ、我々の関心を引く。ルール—我々の関心を引くかぎりのルール—は、遠くから働きかけはしない」(Wittgenstein 1969: 14)。哲学についても、その最も正統的なゲームを支配するルールを学ぼうとするなら、主要な哲学者たちが行ったゲームに参加しなければならない。

第四に、先にチクセントミハイの発言を通して見たように、ゲームは、チャレンジングでなければ面白くないし、またハードルが高すぎても面白くない。単なる自由討論はチャレンジングではない。過去の哲学者の難解な思想を、原書を通して解明していくことは、努力を要する。もちろんそれを最初から一人で行おうとするなら、自分が本当に乗り越えたかどうか分ならず、フラストレーションに陥るしかないであろう。しかし学生と教師が共同作業に従事するなら、その壁を突破すること、またその事実を確認することが可能になる。それは win-win ゲームにおける大きな喜びとなるであろう。しかもこの場合、win-win ゲームの勝利者は、学生と教師だけではない。ちょうど我々がだれかの文章にその人の息遣いを感じるように、原書の言葉にはその哲学者の息遣いがある。原著を通して教師と学生がともに学ぶとき、過去の哲学者も win-win ゲームに参加し、勝利者として立ち会ってくれると言っても過言ではないと思われる。

## 5. 書くことの重要性

以上、哲学を学ぶということについて考えてきた。哲学の入門と専門哲学との間で、基本的姿勢に本質的な違いはない。そのことは、おそらくは本論考の冒頭で述べた(2)ソクラテスが考えた、すべての人が携わるべきものとしての「哲学」と、(3)プラトンが考えていた、長い修練を経た上での「哲学」の関係についても言えるであろう。プラトンも、あらゆる人々が(2)に携わることを否定するわけではないだろう。ただ哲人王として政治に携わるためにはそれだけでは足りず、(3)も必要とされるのである。

現代の複雑に発達した社会においては、プラトンの生きた古代とは異なり、刻々と移り行く情勢の変化に対応する総合的な知が求められる。特に大学で学んだ者は、それぞれ仕事を任された各領域において、問題を明確化し、多元的価値観に配慮しつつ問題解決に当たり、関係する人々と協力して win-win ゲームの勝利者となっていくことが求められる。それぞれの持ち場での「哲人王」となることを求められていると言ってもよいかもしれない。ロイドは、大学での教育について次のように述べている。

必要とされているのは、専門家自身が学部レベルでみずから教える際に、よりいっそうゼネラリスト (generalist) であろうと心がけることである。……優れたゼネラリストであるということは……つながりをつけるのがうまいということの意味する……われわれの先人たちは実にゼネラリストだった。……歴史の教える第一の教訓は大学がいま一度、大学とは普遍的な知を探求し伝達する場であって、専門的な学問諸分野におけるその諸断片を探求し伝達する場ではないという理想をもっと真剣に受けとらねばならないということである。この困難な目標が達成されるために、……学生が触れるべきより広い全体像 [は] ……数学、自然科学、社会科学、人文学という四つのコア (中核) となる学問分野から構成されるべきである。このうち最後のものの場合、文学、世界史、諸文化の多様性といった、真にグローバルな学習が一言の障壁のゆえに、その達成は実際には非常な困難を伴うことをわきまねばならないにせよ - 最高位を占めるべきである。理想的には、学生はこの四つの分野のそれぞれにおいて、知の最前線の仕事のいくらかの局面と、またその最前線への到達に至った道筋について手ほどきを受けるべきであろう (Lloyd

2004: 151-52 = 2009: 220-21)。

そのためには、教養教育としての哲学（哲学概論、西洋哲学史概説）においては、できるだけよい日本語訳、またある場合は英訳を通して、過去の偉大な哲学者の言葉に触れ、彼らとともに考える機会を学生に提供すべきである。また少し進んで哲学者のテキストを読み進める授業、また自分の研究を発表し、質疑応答を通して、それをより完成したものに仕上げしていく授業（名古屋大学の哲学専門では大学院と学部の共通授業）においては、過去の哲学者のテキストの世界に（少なくとも英語を通して、できれば原典を通して）入り込み、そこで展開される諸議論を内部から理解し、問題を明確なかたちで設定すること、さらには二次文献を的確に読み、まとめ、諸概念の繋がりを見つけ、意味ある何かを生み出すことが求められる。

ここにおいて重視されるのは言語化の試み、特に書くことである。この作業が、論文執筆が重視される哲学研究者にとって重要であることは言うまでもない。しかしそれはまた、哲学初歩に接する学生たちにとっても重要である。新入生に長いレポートを課すると、しばしば教室から悲鳴ともため息ともつかない声が聞こえてくる。そのような時、私は、頭（すなわち脳）を動かすことよりは、まず手を動かすようにとアドバイスする。なぜなら、第一に、手を動かすことによって脳は活性化される。第二に、書くことは、自分の思考を目の前に展開し、その諸部分を比較することを可能にする。第三に、記憶していたことを文書という外部記憶に移すことによって脳のワーキングメモリーが解放され、その空き容量を考察へと活用しうるようになる。第四に、ペネバカーは、心の深い思いを書くことによって不安等の負の感情が減り（それにより空き容量はさらに増える）、免疫力も高まることを明らかにしたが、また次のようにも言っている。

ある主題について自らの最も深い様々の思考と感情を10分間連続して書くことによって、ほとんどすべての学生が、かつては曖昧なままであった主題について、興味深く、洞察に満ちた考えを述べることができるようになった（Pennebaker 1997: 187 = 2000: 266-7）。

自分の思考を外部記憶にとどめる筆記作業の中で、思考は無意識の領域から取り出され、対応すると思われる表現を与えられ、再度、無意識の領域に降ろされる。それにより無意識の思考の諸断片のあるものは繋がれ、あ

るものは切り離され、意味あるネットワークが形成されていくのであろう。

アリストテレスは「哲学は驚きをもって始まる」(『形而上学』982b11-21)と語った。真の驚きは、外的な事柄によって引き起こされるというよりはむしろ、鋭敏な精神によって内発的に感じられるものである。その道の達人は、経験と修練により、無意識的で曖昧なもの、あるいは印象にすぎなかったものに言語的表現を与え、理解し、コントロールする術を心得ている。彼らは、混沌に見える雑多な諸事物の離れた二点間に繋がりを感じ、それを他の人々にも理解可能な言語に表わすことができる。この「繋がり」が別名「驚き」であろう。探求の道を進む者は、無味乾燥に見えたテキストの内に、またつまらないと思われた事物の内に驚きを見出すことができる。「あらゆる自然的なものの中に何か驚くべきものが内在している。ヘラクレイトスは、……かまどで暖まっている彼を見て立ち止まった客人たちに……恐れずに入るように命じた。ここにも神々が存(いま)したまうのだから」(アリストテレス『動物部分論』645a16-21)。哲学および過去の哲学書の中には、確かに人間を超えた何か神的なものが存するのである。

## 注

- 1) ダーウィンの theory of evolution は、日本では一般に「進化論」と訳されている。しかし、最先端の研究をしている友人の生物学者から聞いたところによれば、evolution を「進化」と訳すのは誤りで、中国語訳の「演化」の方がより適切であるとのことである。evolve という語、あるいはその語源のラテン語 *evolvere* には、*ex* (内から) *volvere* (展開する) という意味はあっても、「進歩する」という意味での「進む」というニュアンスはないのである。

## 参考文献

- Csikszentmihalyi, M., 1990 [2008], *Flow: The Psychology of Optimal Experience*, New York: Harper Perennial Modern Classics. (=1996、今村浩明訳、M. チクセントミハイ『フロー体験喜びの現象学』世界思想社。)
- Darwin, Charles, 1879 [2004], *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*, 2<sup>nd</sup> ed. published by John Murray, London. First published in Penguin Classics 2004.
- De Waal, F., 2009, *The Age of Empathy: Nature's Lessons for a Kinder Society*, New York: Harmony Books. (=2010、柴田裕之訳、フランス・ドゥ・ヴァー

- ル『共感の時代へ：動物行動学が教えてくれること』紀伊國屋書店。)
- Gladwell, M., 2005, *Blink: The Power of Thinking without Thinking*, New York: Back Bay Books. (=2006、沢田博、阿部尚美訳、マルコム・グラッドウェル『第1感－「最初の2秒」の「なんとなく」が正しい』光文社。)
- Goleman, D., 1995, *Emotional Intelligence*, New York, Bantam Books.
- Lloyd, G.E.R., 2004, *Ancient Worlds, Modern Reflections: Philosophical Perspectives on Greek and Chinese Science and Culture*, Oxford, Oxford Univ. Press. (=2009、川田殖、金山弥平、金山万里子、和泉ちえ訳、G.E.R.ロイド『古代の世界 現代の省察－ギリシアおよび中国の科学・文化への哲学的視座』岩波書店。)
- Luhrmann, T., 1989, *Persuasions of the Witch's Craft*, Cambridge, Massachusetts, Harvard University Press.
- 西周、1960、「西洋哲学史の講案断片」『西周全集』第1巻〔復刻版〕宗高書房
- Pennebaker, James W., 1997, *Opening Up: The Healing Power of Expressing Emotions*, New York: Guilford Pr. (=2000、余語真夫監訳、J.W.ペネベーカー『オープニングアップ:秘密の告白と心身の健康』北大路書房。)
- Pink, Daniel H., 2009, *Drive: The Surprising Truth about What Motivates Us*, New York: Riverhead Books. (=2010、大前研一訳、ダニエル・ピンク『モチベーション 3.0－持続するやる気(ドライブ)』をいかに引き出すか』講談社。)
- Seligman, Martin E.P., 2002, *Authentic Happiness*, New York: Free Press (=2004、小林裕子訳、マーティン・セリグマン『世界でひとつだけの幸せ－ポジティブ心理学が教えてくれる満ち足りた人生』アスペクト。)
- 田中美智太郎、1977〔改版〕(1950)、『哲学初歩』岩波書店(岩波全書)。
- Vygotsky, Lev S., 1986, *Thought and Language*, translation newly revised and edited by Alex Kozulin, Cambridge, Massachusetts/London, The MIT Press.
- Wittgenstein, L., 1969, *The Blue and Brown Books*, 2<sup>nd</sup> ed., Oxford: Basil Blackwell. (=1975 大森莊蔵訳、ワイトゲンシュタイン『青色本・茶色本』(ワイトゲンシュタイン全集6)大修館書店。)